

中村 るい (高知大学)

長田 年弘 (筑波大学)

5月17日(土) 10:00-10:40 大隈記念講堂大講堂 第一分科会

---

---

## 神々の臨席

### —パルテノン・フリーズにおける見えない神—

---

---

パルテノン神殿フリーズの主題に関して、様々な解釈が提唱されているが、パナテナイア祭など、浮彫全体がアテナイの祭祀と行列を表していたとする意見が大勢を占めている。近年の傾向としては、都市国家による、社会的あるいは政治的なメッセージの解釈を重視する方向性を指摘できる。すなわち Castriota, Wesenberg, Pollitt, Hurwit 他多くの、フリーズ浮彫を、アテナイ帝国主義の顕揚の表現と見なし、Wrede, Fehr 等の論考は、アテナイ民主主義と市民文化への称賛を読みとる。

こうした政治的ないし社会的解釈に対して、祭祀という古代宗教の側面は、近年の研究においては十分に考察されていないように思われる。しかしフリーズ東面の聖衣奉納図における儀礼の考察は、Kloeckner, Platt 等による、神々の顕現と地上の出来事への介入をめぐる論考にも見られるように、美術史及び宗教史研究において重要な意味を有する。

フリーズが成立した、前5世紀前半から中葉の作例群を鑑みると、アテナイ陶器画や地方神殿の装飾彫刻群において、神格を表現するための新しい図像が模索されているように考えられる。すなわち、登場人物(例えば英雄)の眼に映じていない「見えない神」による「介入」の表現である。これまで指摘されていないが、これは神々の支援と支配を強調する、新しい図像系列である。典型的な例として、『マラトンの戦い』(ストア・ポイキレ大絵画)、『アイアスによるカッサンドラ暴行』(陶器画)、『ヘラクレスとアトラス』(オリンピア・メトブ)、などが挙げられる。前5世紀前半の造形活動に、不可視の神の視覚化が新たな主題として浮上したのである。用途や機能を問わず、様々な作例で「見えない神」を空間内でリアルに表現し、人間と並存させる試みである。この図像系列の、いわば終着点がパルテノン・フリーズにおける12の守護神の表現であったと考えられる。新しい神格の表現を追求した背景に、おそらくペルシア戦争体験が関わっている。Platt 等の宗教史家の指摘する、大戦争後に成立した、神々の支援と顕現の民俗的な伝承が、図像の成立に関与していたと思われる。

私たち研究グループは、2009年から祝祭に臨席するパルテノン・フリーズの神々の像を、クレイ・モデルを用いて復元する試みを継続している(東京藝術大学・美術解剖学研究室制作。制作統括:木本諒・加藤公太)。Neils (1999)等の研究成果を発展させ、神々の空間を立体的に再現する試みである。2011-2012年に大英博物館で、2013-2014年1月にベルリン及びシカゴの国際学会にて立体復元の発表・展示を行った。これらを踏まえ、今回の発表は、パルテノンにおける革新的な創造が、古代人の眼前に出現し、人と空間を共有する神々の表現にあったことを、図像系列と立体復元模型を融合して示すものである。